

## ミスターイミグレーションの自画像

坂中英徳

坂中英徳は何者か

最近、親しい在日アメリカ人から、「坂中さんのような人物が日本に存在するのは不思議。どのような人間なのか関心がある」といわれた。そんなことを言われてもにわかには答えられない。そもそも「坂中英徳は何者か」について深く考えたこともない。

ただ、わたしは『今後の出入国管理行政のあり方について』『入管戦記』『新版 日本型移民国家への道』などの著書で世界観や行動美学を披露している。たとえば、タブーへの挑戦と有言実行を旨とする反骨の官僚の軌跡を語った。移民政策を論じた主要著書を読んでもいただければ、日本的思考と美意識の持ち主の典型的な日本人であることがわかってもらえると思う。

私は日本人の中では特異な人種に属すると思うが、たくさんの「あだ名」をいただいた。1975年に執筆した『今後の出入国管理行政のあり方について』という論文が「坂中論文」と呼称されたことに始まり、「救世主」「移民革命の先導者」「冷酷な官僚」「売国奴」「移民政策の元凶」など様々な通称あるいは異名をつけられた。

そのほか、2005年に出た『入管戦記』という本の帯で「反骨の官僚」「ミスター入管」と呼ばれた。

2014年5月、日本外国特派員協会において講演した際には、同協会の専務理事が「坂中英徳氏は『ミスターイミグレーション』として知られている」と、外国人ジャーナリストに紹介した。

物議を醸すような移民政策論文を数多く発表し、その実現に努力した実績がものを言って、そのような多彩な顔がある坂中像が形成されたのだろう。

それらの論文を参考にして自画像を描く。荒削りのデッサンにすぎないが、坂中理解の一助になれば幸いである。

坂中論文と共に歩んだ人生

処女作の『今後の出入国管理行政のあり方について』で入管政策論を展開したことで移民政策一本の人生行路が決まった。一本の政策論文がひとりの日本人の一生を決めることもあるのだ。日本の未来を決める重要な役割を演じることもあるのだ。

1975年2月、法務省入国管理局が、「今後の出入国管理行政のあり方について」という課題で職員から論文を募集した。この年、出入国管理行政発足25周年を迎えることを記念して行われた行事の一環だった。

この論文募集に若輩の私も応募した。そして審査の結果、私の書いた論文が優秀作に選ばれた。記念論文の審査委員長を務めた竹村照雄氏(当時法務省入国管理局次長)の選評が私の手元にある。身に余る評価をいただいた。その時、私の進む道が定まった。以後、移民政策研究一筋の道を歩むことになる。

〈第一部優秀作の坂中論文は、その視点において、その構想において、その論証において、まことに見事なものであり、「二十五周年記念」とするに全くふさわしい内容というべきであった。審査員全員が一致してこれを優秀作に推したのである。出入国管理行政を世界的な変化発展の中で位置づけ、外国人の人権保障への明確な意識と国益との調和を目指して将来を展望し、しかもいたずらに理想に走ることなく、絶えず足下現実の問題に即し、これに立ち返りつつ議論を進める態度は、その考察の基礎となっている資料の豊富さとともに、力強く迫るものがあった。〉

当時を振り返ると、私は運がよかったのだと思う。上司のなかに竹村照雄氏のように高い見識と鋭い問題意識を持った人物がおられたのである。坂中論文は最高の行政官に見いだされて無事誕生した。しかし、その後の歩みは、順風満帆というわけにはいかなかった。世間の猛烈な荒波にもまれる波瀾万丈の未来が待っていた。

1977年、竹村氏のすすめで論文が公にされるや、在日韓国・朝鮮人問題を考えるうえでの古典的文献と評価される一方で、20年近く研究者や活動家の間で賛否両論の激論が闘わされることになった。

坂中論文で述べた私の考えは、執筆から40年がすぎたいまも、基本的に変わっていない。論文で提案した政策提言は次々と実現した。残された課題が世界のモデル国となる移民国家の創立である。

古い先の短い私は坂中論文がたどった激動の歴史を回想することが多くなった。坂中論文と共に歩んだ人生の幸せをかみしめている。幸運の星の下に生まれた坂中論文は天寿をまっとうし、いま壮烈な一生を終えようとしている。

#### アンタッチャブルの課題に挑んだ男

入管時代、誰もが恐れて手をつけない課題に挑んだ。アンタッチャブルとされる問題と格闘した。それが幸いした。競争相手がいない私の独壇場であったので自由自在の活躍ができた。

在日朝鮮人の処遇問題(1975年)に始まり、中国人偽装難民事件(1989年)、フィリピン女性の人身売買事件(1995年)、北朝鮮残留日本人妻の帰国問題(2002年)、人口減少社会の日本の移民政策のあり方(2004年)など、出入国管理行政上の難問と取り組んだ。法務省を退職後は移民政策研究所を設立。以後、人口崩壊の危機に襲われた祖

国を救うべく、移民国家ビジョンの構築とその実現に全力を傾けている。

これらの問題は、私の問題提起を受けて大論争に発展した。40年間、移民政策に関する理論構築と理論の実践を積み上げた努力が実を結び、国民の大半が実現不可能と考えていた移民鎖国体制をくつがえすことができた。未踏の原野を往けば視界が開けるといふ本だ。

現在のわたしは、移民政策のオピニオンリーダーの立場から、世界の模範となる移民国家の建国を国家・国民に迫っている。未曾有の人口危機を乗り越えた移民国家日本が、世界の若者が移民したいと憧れる国として屹立する時代を見据えている。

### 運と奇跡が頼りの冒険人生

移民政策一本の道を振り返ると、政策論文を書き続けることの精神的苦痛は大変なものだったの一言に尽きる。政策の実現に捨て身で立ち向かったときのことは鮮明に記憶している。しかし、政策が実現したときに達成感を覚えたことは一度もない。よく精神の異状をきたさなかったものだ自分でも感心する。30の時に代表的な政策論文を書き、あまたの非難・罵倒を受け、何物も恐れない強靱な精神力が形成されたのだろう。

いま、私の人生において1975年の坂中論文以来40年ぶりにゆったりした気分になっている。駆け出しの行政官のときにまるで神業のような政策論文を書いたことの責任の重圧を乗り越え、よわいを重ね、ようやく心やすらかな心境になったのだと思う。

坂中論文で公言した約束をはたした。日本の移民国家体系の理論的基礎を築いた。日本が全面崩壊を免れる起死回生策＝移民政策を立案した。そんなふうになるようになって、迷いが消え、安心立命の境地に達したのだろう。

自分の実力以上の仕事を成し遂げたと思うが、精魂を込めて事に当たれば一念天に通ずるということなのだろう。にっちもさっちも行かない難局に直面したときには天が救ってくれた。奇跡としか言いようのないことが起きて活路が開かれた。

運と奇跡が頼りの冒険人生が尋常なものではないことは自分でもわかっている。綱渡りの連続の役人生活をすごした。無事退職できたが、入管時代の晩年、「命があったのが奇跡」と、上司から忠告された。息子からは、「お父さんはできもしない無謀なことを道楽でやっている」と言われた。身近で見ていると、見果てぬ夢を追いかけて楽しいそうに仕事をしているように写るのだろうか。案外私の一面を衝いているのかもしれない。

お天道様が見ているので人の道に外れたことはできないと肝に銘じ、自分なりの正義感を貫いた。全試合、真っ向から直球で勝負した。移民政策の理論的基礎を固め、四面楚歌と悪戦苦闘が続く中、ひたすら移民国家への道を突き進んだ。

無人の荒野を一人行くがごとく、単身で移民国家の創建に挑んだ。多勢にひとりで立ち向かう死闘を演じたが、奇跡的に生き残って坂中英徳は今も健在である。

以下は、移民政策が正念場を迎えた私の決意表明である。人口危機に見舞われた日本を

救う「救世主」の責任をはたす。「移民革命の先導者」として最前線で闘う。できれば、日本型移民国家の理論的基礎を築き、後世の日本人から「移民国家の産みの親」のあざなで呼ばれたい。

### 移民政策三昧の地方局長時代

法務省時代、1997年4月の人事異動で仙台入国管理局長の辞令を受けた。以後、二度と法務本省で勤務することはなかった。

福岡入国管理局長、名古屋入国管理局長、東京入国管理局長のポストを歴任し、2005年3月、法務省を退職した。

8年間の地方局長時代、何をやっていたのか。決して暇をもてあましていたわけではない。実は、ルーチンワークをこなすかたわら、執筆活動に精を出していたのだ。その成果物が、次の6冊の本である。

- ①『出入国管理及び難民認定法逐条解説 新版』（共著、日本加除出版、1997年）
- ②『在日韓国・朝鮮人政策論の展開』（日本加除出版、1999年）
- ③『出入国管理及び難民認定法逐条解説 全訂版』（日本加除出版、2000年）
- ④『日本の外国人政策の構想』（日本加除出版、2001年）
- ⑤『外国人に夢を与える社会を作る——縮小してゆく日本の外国人政策』（日本僑報社、2004年）
- ⑥『入管戦記』（講談社、2005年）

もう一つ力を入れたことがある。1997年の夏から、10年以内に訪れる人口減少社会の移民政策のあり方について思索する研究三昧の生活を送った。その努力の結晶であり坂中移民国家論の原型といえるのが、前記の『入管戦記』（第9章「2050年のユートピア」と、第10章『『小さな日本』と『大きな日本』』）である。

入管時代の晩年は充実したものだった。退職後の飛躍につながる雌伏8年であった。地方入国管理局長時代、来るべき人口減少時代をにらんで移民政策研究に励んだから、「ミスターイミグレーション」の名で呼ばれる今の自分があるのだと思っている。

### ミスターイミグレーション

学生時代の私はノンボリの平凡な学生であり、平穏な人生を望んでいた。それで国家公務員の職を選んだ。その時、まさか禁忌との闘いに明け暮れる役人人生を送ることになるとは夢にも思わなかった。

しかし何が幸いするかわからないのが人生だ。外国人行政を担当する法務省入国管理局に就職したことが縁で日本最大のタブーの移民問題と相対することになった。

また、どんなハプニングが起きても不思議でないのが人生航路だ。60になって人口崩

壊という有史以来の危機にある祖国を再建する「移民国家の設計者」の役が回ってきた。

日本の新しい国づくりが移民政策の専門家の双肩にかかることになった。平成時代の日本人の誰かが引き受けなければならない重責である。移民国家理論のプロフェッショナルの道を歩んだ坂中英徳に下された天命としてしかと承る。

今度も天の助けがあって日本再生の奇跡が起きるだろう。私の運は天職を与えられたことで尽きたと思うが、移民国家に生まれ変わった日本の国運は隆盛に向かうと固く信じる。

理性的に考えると、日々の努力と節目での決断の積み重ねがあって、今の自分があるということなのだろう。すべて自分のなせる業であり、理論を実践した賜物であるというのが合理的な見方なのだろう。しかしながらそこにもなにほどこかの天運の働きがあったにちがいないと思っている。

2012年10月の『ジャパントイムズ』において、在日歴30年の外国人ジャーナリストが坂中英徳を「移民革命の先導者」と内外に紹介した。保守の典型の私がなぜ革命家と呼ばれる人間になったのか。

それも天の巡り合わせである。移民政策の立案をライフワークとする日本人が、人口崩壊の危機が迫る「革命の時代」と遭遇したのだ。移民政策のエキスパートの道を歩んだのは、天佑のたまもの「坂中論文」を書いたからだ。それをきっかけに移民政策の勉強を根気よく続けて、いつのまにかミスターイミグレーションの名で世界の知識人から呼ばれるようになった。非難と罵倒を受ける時代が長かった私にとってこれは最高の称号である。

いろいろなことがあったが、トータルで評価すれば、天運にめぐまれ、天命を知り、天職に従事する百点満点の人生だったと思っている。

### 移民革命の主役は国民

日本人が不在のまま歴史の必然や外圧によって移民国家に転換すれば後世に禍根を残す。それでは、国民は日本の歴史を変える運動に参加しないし、エキサイティングな歴史体験を共有することもない。

移民国家の創立という千年に一回の大舞台で主役を演ずるのは国民である。移民政策について徹底的に議論し、新しい国づくりに主体的に参加し、多民族共生国家を創るビッグチャンスを自分の手でつかみ取ってほしい。

国民の希望と熱意が国を動かし、国の形を変えるのだ。その場合、国民も体内にしみこんだ島国根性を改め、人類愛の心をはぐくむ。そこから新たな日本文明の創造が始まる。壮大な歴史ドラマが生まれる。

私が唱える「日本型移民国家への道」は理想論あるいはユートピア計画といわれているが、その批判は当たっている。問題は、それが普遍的妥当性を持ち、多くの国民の共感が得られるかである。

私は日本が好きな平均的な日本人である。全面崩壊の危機にある日本を救いたい一心で、

日本人と移民が平和共存する移民国家像を描いた。しかし、それが日本人の心にどこまで届いたかについては自信がない。

移民に対する日本人の感情が好転し、日本人が移民と共に生きることに心の底から喜びを感じるようになるまでには長い年月を要するのだろう。

日本人の教養のレベルは世界の最高水準にあると言っても過言ではない。八百よろずの神々を信仰する日本人は決して排他的な民族ではない。地球上のどの民族よりも広い心で移民を迎える素養がある。

100年後の日本人は、人類の理想郷である人類共同体社会を築いているだろう。100年前にそれを予言した日本人がいたといわれる時代を思い浮かべている。

### 平成の志士に移民国家の建国を引き継ぐ時がきた

私のライフワークの「移民国家への道」は最終段階に入ったようだ。人口崩壊の問題の重大性を指摘し、その解決策としての移民国家理論の完成を見た。あとは、政治家を動かす仕事が残っている。最後の移民立国を政治に迫る仕事は若い世代に委ねたい。

平成の志士が移民国家の建国に立ち上がる時がきた。古今東西を問わず歴史を動かすのは決まって未来のある若者たちだ。若者が新国家建設の主演を演じ、私が後方からそれを支えるのが本来のあるべき姿である。

わたしは移民政策研究のパイオニアとしての象徴的な役割をはたす。責任を逃れるわけではない。仕事の力点を移民政策理論の構築からその啓発活動に移すということである。私が一歩引くことによって、坂中ドクトリンに共感する新進気鋭と各界の叡智が集結し、国家的事業の完成の早まることを期待する。

古希を迎え、天職を授かった晩年をいかに生きるべきかを考えるようになった。引き際も真剣に考えている。

坂中構想が山場を迎えると、山あり谷ありの厳しい試練が待っている。渾身の力をふりしぼって難局を切り開き、移民国家への道をつけたい。そのうえで第一線から身を引いて波乱の職業人生の幕を閉じたい。そのように何もかも思いどおりには事が運ばないのが人生の常であることは分かっているが。

### 画竜点睛を欠く未完の人生

わたしは在日朝鮮人政策をもって移民政策の嚆矢とし、それ以後、40年間、移民政策一本槍の人生を歩んだ。最近では、誰もが恐れをなしてさわろうとしなかった移民国家構想の立案に全精力を傾けた。ひとり旅の状況が続く中、自らを叱咤激励し、移民国家の根本原理の究明に心血を注いだ。

その間、切れ目なく移民政策論文を書き続けた。移民政策研究の白眉といえるのが、2

014年に出た『新版 日本型移民国家への道』（東信堂）である。そしてこの5月、日本の移民開国を待望する方向へ世界の世論を動かすため、英文の移民政策論文集：『Japan as a Nation for Immigrants』を発行した。すでに坂中移民政策論の海外の評価は定まっているので、この本は世界の知識人に衝撃を与えるだろう。

最近、親しい英国人ジャーナリストから、「革命的な移民国家構想を公言している坂中さんに官邸から圧力がかからないのですか」と聞かれた。私は「四面楚歌の状況に変わりはないが、永田町から坂中構想に対する批判、圧力は一切ない」と答えた。彼は「日本は自由にものが言えるいい国ですね」と述べた。

日本政府は危険な思想家の唱える移民革命思想を敬して遠ざけるといふか、無関心を装って泳がしているといふか、つまり傍観者の立場に終始した。政治が私の移民国家構想に干渉することはなかった。それが幸いした。自分のやりたいことを自由にやることができた。気がつけば、移民政策研究の第一人者になっていた。

私の使命は移民国家理論の完成で終わらない。移民国家の建国という大業が残っている。国家百年の偉業を達成すれば坂中移民国家論は有終の美を飾れるが、国事に奔走する私にとってそれは私事だ。大事の前の小事だ。それに、何もかもうまくゆく人生は私の性に合わない。「功成り名を遂ぐ」というような人生はまっぴらだ。難行苦行が続く挑戦者の人生をまっとうする。決して挫折はしないが、ハッピーエンドも期待しない。

20代の時分から、いい事づくめの人生などこの世に存在しないという人生観を抱いていた。70になった今も、よい事とそうでない事とが半々で終焉を迎えるのがちょうどいい人生と思っている。理路整然とした論文のような人生などあり得ない。仮にあったとしても、そんな人生は心の葛藤も人間味もない無味乾燥な人生だ。私の趣味に合わない。

画竜点睛を欠く未完の人生に憧れる。波乱の職業人生において有言実行をモットーに生きてきたが、この人類未踏の移民国家の創建については未完成交響曲で終わるのがいい。移民国家の指針となる理論体系を完成し、八分までの困難の仕事を成し遂げたので思い残すことはない。残りの仕事は若い世代が完成してくれる。

肩書きのない人で人生の幕を閉じたい

最新作の「新版 日本型移民国家への道」（2014年10月）の刊行をもって私の移民国家理論は完成を見た。これからは、この本を使って移民国家の議論をリードし、移民国家の建国の日を静かに待つ。心の広い国民の後押しで移民国家への道が開かれると信ずる。

1975年の坂中論文以来、自分が立てた政策目標に追い立てられる人生を駆け抜けてきた。問題提起は大論争に発展したが、あまりにも遠大な理想を掲げたので政策実現への道は難航をきわめた。政策提言は日本の知的世界からは無視され、四面楚歌の時代が長く続いた。

命を大切にすがるが、命に執着しない。もう十分はたらいた。自分のやるべきことはすべ

てやった。日本の存亡の危機を救う移民国家のグランドデザインを書き上げた。日本国民が世界の先頭に立って人類共同体社会の創成にまい進する近未来を描いた。

移民政策一本槍の人生行路に悔いはない。ただ最期のいつときは目標から解放された無為の人でありたい。肩書きのない人で人生の幕を閉じたい。

「反骨の官僚」と呼ばれた元行政官がどうして革命家になったのか。それは偶然のなせる業である。外国人行政に身を投じ、移民政策の立案をライフワークとする日本人が、人口崩壊という「日本史上最大の国家的危機」とめぐり合ったからだ。

移民政策のエキスパートの道を歩んだのは、奇跡が起きたとしかいいようがない政策論文(坂中論文)を1975年に書いたからだ。その後、移民政策に関する理論的研究と理論の実践を着実に積み上げた結果、世界のジャーナリストから「ミスターイミグレーション」の名で呼ばれるようになった。

波乱の職業人生を振り返ると、行政官として一途な気持ちで移民問題と取り組んだが、特別の才能があったわけでも人一倍の努力をしたわけでもない。あたかも天から白羽の矢が立ったかのように移民革命の先導者の地位を授かったということである。そういう運命だったということなのだろう。つつしんで受け入れる。

#### 移民政策をすすめる会の発足

6月22日、移民を求める世論の高まりに呼応して、「移民政策をすすめる会」(野田一夫会長、坂中英徳政策アドバイザー)が発足した。野田一夫日本総合研究所会長を長とする22名の精鋭が、各界各層の移民賛成の声を結集し、移民国家創建の歴史的決断を内閣総理大臣にお願いするため立ち上がった。

新しい国づくりへの門出の日、野田一夫先生を囲んでわれわれは何をなすべきかについて自由闊達な議論を行った。老と壮からなる平成の侍が一丸となって国事に奔走する態勢が整った。私は移民政策の専門家として日本が誇る老闘士・野田一夫会長をしっかり支える。

4月18日の朝日新聞の移民に関する世論調査の結果によると、「永住を希望して日本にやってくる外国人を、今後、移民として受け入れることに賛成ですか。反対ですか」の質問に対して、移民に賛成が51%、移民に反対が34%で、賛成が反対を上回った。これは驚くべき数字である。移民受け入れをめぐる世の中の空気は劇的に変わった。今こそ移民推進論者の出番である。

一方、最近の移民亡国論者の動きを見ると、ヘイトスピーチ団体など移民反対派の運動は失速する可能性が高い。国民の圧倒的多数は人種憎悪団体や排外主義者にくみしないことが明らかになった。

人口崩壊の危機が迫る日本を救うべく集まった憂国の士が、移民国家への道は最終段階に入ったとの共通認識に立って、産業界、教育界、地方公共団体など諸団体の移民賛成の



声を吸い上げ、掘り起こし、盛り上げ、それを政治に伝える先導役をはたす。

日本は移民国家に生まれ変わる千載一遇の機会とめぐり合った。2020年の東京五輪の開催である。首都東京を筆頭に全国いたるところで少子高齢化が猛烈な勢いで進行中の日本は、移民国家として世界に飛躍する天の時を得た。

国民は千年に一回の移民革命を行う覚悟を決める。政府は移民立国の国民合意を取りつけるため東京オリンピックを最大限活用する。

こんなビッグチャンスは二度と巡ってこない。オリンピックの大舞台で移民国家日本の華麗な姿を披露すれば、世界各国の人々は拍手喝采で迎え、世界の若者は移民の期待に胸を膨らます。

移民政策をすすめる会の初会合では、5時間にわたって熱気あふれる議論が戦わされた。この日88歳の誕生日を迎えられた野田一夫先生は最後まで議論に参加され、私たちを導き、私たちに檄を飛ばされた。日本を代表する知識人の警咳に接した若い人たちにとってこの日は生涯忘れられない日になったと思う。私は革命前夜の感慨にひたった。

「2015年6月22日」は移民革命の志士たちが決起した日として日本の歴史に刻まれるに違いない。